

ロイ・チャップマン・アンドリュースの鯨類調査と下関 —東洋捕鯨の蔚山事業場における捕鯨事業を中心として—

宇仁義和

Roy Chapman Andrews in Shimonoseki, and his Research Activities around Korea:
focused on the whaling operation at Ulsan Station, Toyo-Hogei Co.

Yoshikazu Uni

東京農業大学オホーツクキャンパス unisan@m5.dion.ne.jp

Tokyo University of Agriculture, Abashiri

はじめに

ロイ・チャップマン・アンドリュース Roy Chapman Andrews 1884–1960 は、ニューヨークのアメリカ自然史博物館 American Museum of Natural History (AMNH) の学芸員で、1920年代にゴビ砂漠で恐竜の卵を発見したことで名高い野外研究者である。博物館では館長に上り詰めたほか、映画の主人公インディ・ジョーンズ Indiana Jones のモデルといわれている (図1)。日本での知名度は高くないが、アメリカでは自国が生んだ20世紀の探検家として高く評価され、郷里のウィスコンシン州ベロイト Beloit ではロイ・チャップマン・アンドリュース協会 Roy Chapman Andrews Society が設立されている。恐竜のイメージが強いアンドリュースだが、研究者としての経歴は鯨類に始まっている。日本には1910年に滞在し、東洋捕鯨の紀伊大島 (和歌山県) と鮎川 (宮城県)、1912年には当時日本領だった蔚山の捕鯨事業場で鯨の生物学的調査を行ない、北米での調査を併せて主著 *Whale Hunting with Gun and Camera* [銃とカメラで鯨狩り] を著した (Andrews 1916)。日本と朝鮮での調査は東洋捕鯨の全面的な協力の下に行われたもので、同社との出会いの地が下関であった (宇仁ら 2014)。

本論では、筆者らの調査によって明らかにされた、アンドリュースと下関との関係を紹介するとともに、東洋捕鯨の社内文書「事業場長必携」から蔚山事業場を概括する。また、併せてアンドリュースが行なった朝鮮探検についても触れてみたい。

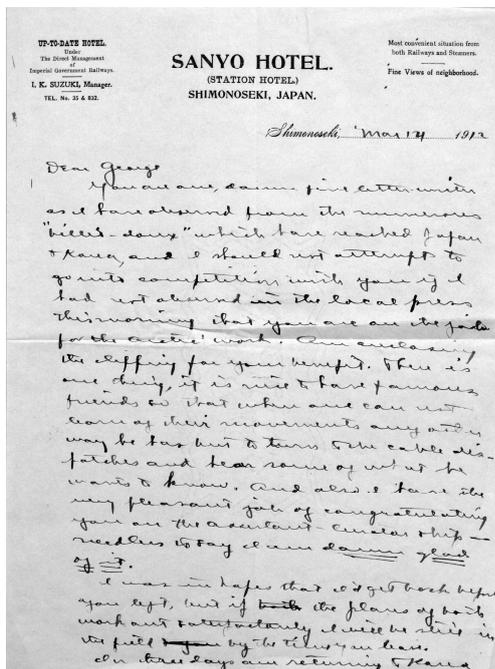


図1. ゴビ砂漠でポーズをとるアンドリュース (1928年)。Image #338695 American Museum of Natural History Library

アンドリュースと下関

アンドリュースが最初に下関へ来たのは、1910年2月後半のことであった(宇仁ら 2014: 53)。鯨類調査の打合せに滞在地の長崎から東洋捕鯨を訪問したもので、社長の岡十郎にも面会している(渋谷 1967: 108)。この後、アンドリュースは引き続き日本に滞在して鯨類調査を同年8月まで実施した。調査中の行動には不明な点も多く、収集した鯨類骨格の発送で下関を訪れたという本人の記述もあるが(Andrews 1916: 91)、報告書や書簡、調査日誌にはそのような記載はない。

次にアンドリュースが下関と関係するのは1912年である。アメリカ自然史博物館研究図書室に彼が下関から出したと思われる手紙が保存されている。手紙は北極探検を成功させアメリカ自然史博物館の学芸員となった George Borup、後にアンドリュースの妻になる Yvette Borup の兄、に宛てたものである。この手紙は、当時下関を代表するホテルであった山陽ホテルの便箋に書かれており、1912年3月14日の日付が「下関」に続けて記されていることから、下関からの手紙と考えられる(図2、



ANDREWS (R. C.) A. L. s., shimonoseki, March 14, 1912. congratulate Mr. Borup on the Arctic trip and his plans for exploring in Korea; Folder Andrews, Roy Chapman Letters from Japan 1912 and 1918, AMNH Research Library Special Collections)。内容は、これから向かう朝鮮探検についての意気込み、そのためにソウルのアメリカ領事館の住所を知らせて欲しいと記されており、蔚山での調査終了後、後述の朝鮮探検 The Korean Expedition の前に差し出されたものと考えられる。また、アンドリュースが当時の上司であったアレン Allen 主任学芸員に宛てた報告書 "Report of Korean Expedition, 1911-12" (from Andrews to Allen, 5 Sept. 1912; Folder ANDREWS, ROY_CHAPMAN_ Expeditions_ FOLDER_III-1_1908-15、以下「朝鮮探検報告書」)では、下関の滞在は3週間で、これは魚類研究部門のディーン

図2. 山陽ホテルの便箋に記された1912年3月14日付けのアンドリュースの手紙(アメリカ自然史博物館哺乳類研究図書室蔵)。

Dean 学芸員の依頼によること、下関は日本のトロール漁業の本部でいくつかのトロール船は捕鯨会社が所有していること、下関での調査は日本海の魚類標本をほとんど

完全に集めることが可能であること、フサコフ Hussakof 博士が言うには極めて希なサメがいることと硬骨魚類でもおそらく3-4種の未記載種がいるらしいこと、などが記されている。よって下関訪問の時期は、同年1月から3月まで行なった蔚山での鯨類調査と、引き続いて挑んだ朝鮮探検との間と考えられる。実際にアンドリュースは下関の魚市場で魚類標本を収集し、その一部は *Sciaena ogiwaru* として新種記載された(Nichols 1913)。ただし、これは現在では *Larimichthys polyactis* (Bleeker, 1877) 和名キグチの同種異名として無効な学名になっている。学名に現れる *ogiwaru* はアンドリュースと懇意であった東洋捕鯨の社員 Ogiwara [荻原か] の名前であり、科学者としての謝意を表したものである。2人の関係は Ogiwara が同社を辞め、自身の会社 Nichiei Boyeki Shokai [日英貿易商会か] を興した後も続き、取引先の紹介など事業への協力を惜しまなかった(宇仁ら 2014: 57-58)。

アメリカ自然史博物館の研究図書室には、その時撮影されたと思われる船だまりの写真が1枚保存

されている。同館に保存されている写真のうち、被写体から下関と判断できる、あるいは閲覧用プリントの注記に下関と記された写真はこの1枚のみで、ネガ番号は 229489、注記は Shimonoseki、そして日付は 1912-1910- となっている(図3)。当時の様子を伝える貴重な記録として注目される。

蔚山でのコククジラ調査

話は前後するが、1910年夏に日本での鯨類調査を終えたアンドリュースは、翌1911年の12月に再び太平洋を西へ横断する。朝鮮探検報告書によると、ニューヨーク出港が12月3日、日本には1月1日に到着している。そして嵐のなか、1912年1月4日に九州の博多から対馬海峡を渡り船で蔚山に到着した(Andrews 1916:190)。彼にとって初めてとなる朝鮮半島を訪れた目的は、コククジラ調査のためだった。コククジラは体長13-15メートルほどの中型のヒゲ鯨で、北太平洋のアジア大陸沿岸とアメリカ大陸沿岸に分布する。アンドリュースによれば、19世紀末にはアメリカ大陸沿岸の東部個体群は絶滅したと信じられるようになっていたという(Andrews 1914: 232)。ところが、1910年に日本の沿岸捕鯨基地で鯨類調査を行ったアンドリュースは、この絶滅種が朝鮮半島では捕鯨の対象種であることを知り、ぜひとも自らの手で調査をしたいと考えるようになった。実現すれば世界初の科学調査となるからである。彼が目指したのは、秋にナガスクジラ、そして冬にはコククジラを捕獲していた東洋捕鯨蔚山事業場だった(図4)。彼のコククジラ調査の結果については、詳しい報告書が出版されているほか(Andrews 1914)、一般向けの読み物でも触れられている(Andrews 1916: 186-214, Andrews 1929: 118-131, Andrews 1943: 101-108)。また、彼は調査とともに多数の写真と3巻の動画フィルムを撮影した(Andrews 1912a)。報告書には記載されていないが、彼の調査日誌からはザトウクジラやシャチも全身骨格をニューヨークに送っていたことがわかっている(宇仁ら 2014)。朝鮮探検報告書によると、蔚山の標本は、蔚山からいったん下関に送られ、そこからアメリカに向け発送されたと記されており、下関はアンドリュースの収集標本をアメリカに送る中継地の役割を果たしていた。

アンドリュースが書いたコククジラの調査報告書は、写真が多数収録された大判で60ページを越える大作であり、コククジラ西部個体群に関するまとまった論文として唯一のものとして高く評価されている。内容は、外部形態の観察や計測値、骨学、妊娠期間や胎児の成長、捕獲時期や過去の捕獲記録から推定した回遊、そしてアメリカ大陸沿岸を回遊する東部個体群との比較などで、アンドリュース自身が蔚山で調査した23個体に加え、捕鯨会社の従業員による123個体分の計測値が用いられた。外部形態と骨に関する肉眼レベルの観察と計測値がひたすら続く地味な内容の一方、写真には捕鯨船や人物が写ったイメージもあって退屈しない。

報告書では、最初のページで東洋捕鯨とその従業員に対して名前を挙げて謝辞が述べられている。最初に現れる個人名はやはり Ogiwara で、他の幹部職員に加え女性の名前やノルウェー人砲手の名前が見え、事業場や捕鯨船を使用する便宜を図ってくれたこと、骨格標本の採集と輸送への協力、科学調査への理解と日本の商習慣に関する助言、さらには自宅に泊めてくれたり心のこもったもてなしについて触れている。砲手ではメイン丸 Main のメルソン H. G. Melson が最も重要な相談相手だったこと、そしてヨンセン Johnson やヒュールム Hurum (Furum) にも世話になったと記している。メルソンは、朝鮮半島北部の日本海に面した長箭(ちゃんぜん) Chan Chien Dogo での捕獲状況をアンドリュースに伝えており、貴重な情報源だったようである。



図3. Shimonoseki と記されたアンドリュース撮影の写真。おそらく1912年の撮影。Image #229489 American Museum of Natural History Library



図4. 東洋捕鯨蔚山事業場。1912年アンドリュース撮影。Image #218489 American Museum of Natural History Library

この他にも蔚山事業場の様子を伝える作品として、当時の人気作家だった江見水蔭による捕鯨船の同乗体験記『實地探検捕鯨船』がある(江見 1907)。これは操業の様子について写真やイラストを加えて生き生きと記しているほか、当時の社会経済状況についても触れている。東洋捕鯨もその設立を記念して『本邦乃諾威式捕鯨誌』(明石編 1910、復刻版 1989)という単行本を自ら出版しており、当時の日本全体の捕鯨を取り巻く状況がわかる。

蔚山事業場長必携に見る捕鯨の状況

蔚山事業場の様子については以上の資料から知られてきたが、東洋捕鯨の後継会社である日本水産株式会社は、明治大正期に遡る「事業場長必携」(以下「場長必携」と記載)を保存してきた。「場長必携」は、沿岸捕鯨の事業場長が代々引き継いできた操業記録と地域関係の手引きというもので、各事業場の沿革から漁期、捕獲記録、砲手や捕鯨船の名称、漁場の移動、地元への寄付、挨拶先など27項目からなり(表1)、現在の国土に加え、樺太や千島列島、朝鮮や台湾などの海外領有地を含む30か所以上の事業場のものが確認されている(図5)。日誌や伝票、社内文書を編集した累年的な冊子で、幹部職員用の内部資料という性格から記載内容に脚色は少ないと考えられ、一次資料といえる価値を持つ。この資料は企業の私文書であり、一般には非公開である。以降、本論では東洋捕鯨の社内文書「事業場長必携」を用いて蔚山事業場の様子を見てみたい。

表1. 事業場長必携の項目 (一部字句を省略)

1. 沿革略
2. 事業場許可年月日並ニ期間
3. 操業区域並ニ其ノ期間
4. 税金割賦金及負担金
5. 対地元、漁業組合等トノ報酬条件及ビ摘要
6. 公有水面使用面積、料金及許可年月日期間
7. 汽機汽缶、検査期日有効期間及取扱主任者
8. 敷地及建物貸借関係
9. 設置ニ関シ尽力セシ先方
10. 開業当時ノ披露列席者氏名
11. 每期開始ニ際スル披露
12. 每期引揚ケニ際シ挨拶
13. 每期ノ開始及引揚ケ月日
14. 期別、月別、種類別等ノ捕獲
15. 社長若クハ重役出張ノ際ニ於ケル事業場員
事業夫船員及地方有志者ニ対スル振合
16. 特ニ連絡ヲ採ルヘキ官公吏及有志者
17. 定例の寄附
18. 臨時の寄附
19. 事業引揚ケノ際謝礼先
20. 変事
21. 歴代ノ場長及場員
22. 配属ノ船名及上級船員
23. 配属ノ事業夫及常雇ノ延人員
24. 官公衙ヘノ重ナル願、届、報告、及陳情
25. 県令、法規又ハ規約ノ大要並ニ改廢ノ概要
26. 漁場ノ移動(漁場ノ変異移転ノ詳細ナル状況)
27. 其他参考トナルヘキ事項

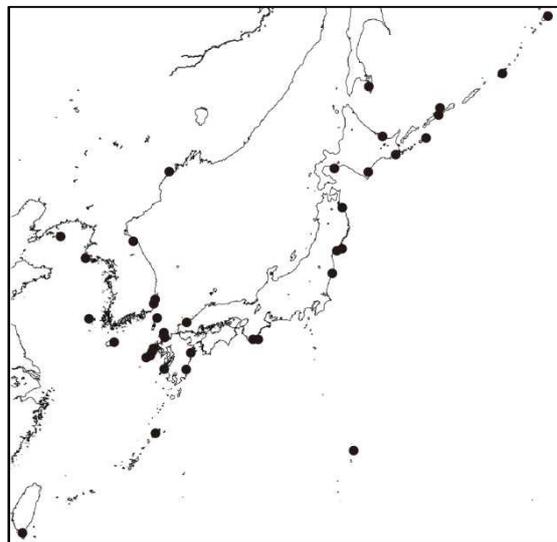


図5. 東洋捕鯨「事業場長必携」の存在が確認されている捕鯨基地の位置。

沿革

日本海でノルウェー式捕鯨（近代捕鯨）を最初に始めたのはロシアの企業で、1890年代初めにウラジオストックを基地にしていた。同時期には朝鮮半島沿岸でも操業し、蔚山湾の長生浦にも解剖場を設けていた（神長 2002）。ところが、日露戦争（1904-1905）によってロシアの捕鯨船は日本に拿捕され、砲手とあわせ日本国内の捕鯨会社に払い下げられ、朝鮮半島での捕鯨の権益も日本のものとなった。

このような状況のなか、「場長必携」では蔚山事業場の沿革を次のように記している。

蔚山ニハ元東洋漁業株式会社、長崎捕鯨合資會社及日韓捕鯨合資會社ノ三會社事業場並立セシカ明治四十二年五月合同ノ結果東洋漁業株式會社長崎捕鯨合資會社ノ二事業場ヲハ東洋捕鯨株式會社蔚山事業場ト改称シ爾來東洋捕鯨株式會社の事業場跡ヲ継襲シ來リ大正三年秋ヨリ従来ノボック式解剖ヲ廢シテ引揚式解剖ニ改メタリ

而シテ日韓捕鯨合資會社ハ明治四十三年六月實質的ニ利權ヲ東洋捕鯨株式會社ニ売渡シタルモ名義ハ依然トシテ之レヲ保存シ同年十月一日ヨリ現場ニ於テ事業ヲ兼營シツヽアリシカ大正五年十一月末ニ至リテ根據地ヲハ大黒山島ニ移転ス其後同社ハ大正八年三月十四日東洋捕鯨ニ合併シ全然東洋ノ手ニ歸シタリ

わかりにくいので、年表風に改めると次のようになる。

年代不明	東洋漁業・長崎捕鯨・日韓捕鯨並立
明治42年（1899）5月	東洋漁業・長崎捕鯨が東洋捕鯨に合同
明治43年（1900）6月	日韓捕鯨の権利を実質的に東洋捕鯨に売却（名義はそのまま）
大正 3年（1914）	ボック式を廃止、引揚げ式に改修
大正 5年（1915）	日韓捕鯨が大黒山島に移転
大正 8年（1919）3月	日韓捕鯨が東洋捕鯨に合併

所在地

「場長必携」では東洋捕鯨蔚山事業場の所在地は棧橋の場所を「龍岑里地先」としており、東洋捕鯨の設立を記念して出版された『本邦乃諾威式捕鯨誌』によれば「長生浦」とだけ記されている。これでは具体的な場所が不明だが、幸いなことに戦前の5万分の1地形図「長生浦」には事業場が「捕鯨會社」として明記されている（図6）。現在の衛星写真（Google Earth）を参考に、現在の地形のなかに重ねて見ると、蔚山事業場の所在地は長生浦鯨博物館の対岸にあったことが明かである（図7）。また地図については復刻版が出版されている（学生社編 1981）。

捕獲鯨類

アンドリュースの調査日誌によると、蔚山事業場で調査した鯨は、1912年1月8日のコククジラに始まり2月24日のナガスクジラまでであった（宇仁ら 2014）。この間に調査した鯨は胎児2頭を含め32頭で大半がコククジラだった。「場長必携」によれば、アンドリュースが滞在した1912年1-2月は事業年度としては1911年度にあたる。1911年度の操業は1911年10月から翌12年4月までで、捕獲実績はシロナガスクジラ1頭、ナガスクジラ58頭、ザトウクジラ6頭、コククジラ146頭の計211頭だった。3-4月の捕獲は記録されていない。ナガスクジラは10-12月に大半が捕獲され、コククジラは12-1月が最盛期

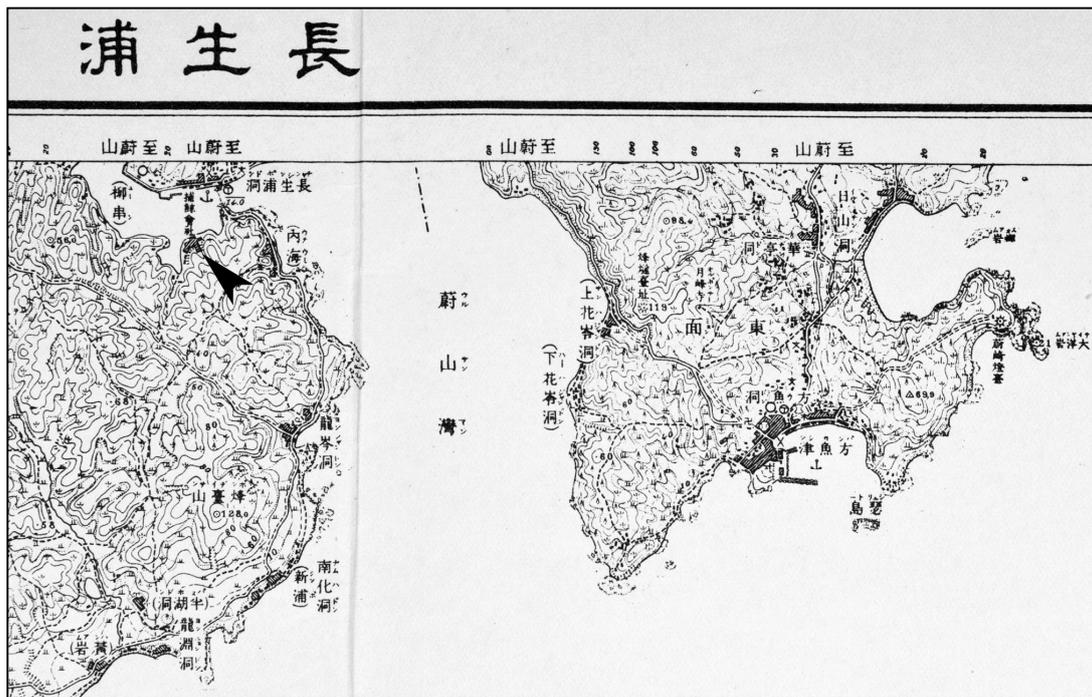


図6. 東洋捕鯨蔚山事業場の位置（矢印）。5万分の1図「長生浦」（大正3年測図、昭和11年修正測量、同17年印刷発行）に加筆（岐阜県図書館蔵）。



図7. 現在の地形に示した蔚山事業場（Google Earthに加筆）。

となっていた。この捕獲記録はアンドリュースの調査日記と矛盾するところはない。

「場長必携」には1910年から1944年に至る捕獲記録が収録されており、期間中の合計は3,212頭、内訳はセミクジラ1、シロナガスクジラ7、ナガスクジラ2,114、ザトウクジラ68、マッコウクジラ2、イワシクジラ2、コククジラ1,018であり、捕獲の3分の2はナガスクジラ、3分の1がコククジラであった。アンドリュースが調査したコククジラは大正7年度（1918）あたりから減少し、大正12年度の捕獲は1頭となり、その後は少数の捕獲が続き、昭和7年度（1932）が最後の記録となっている（表2）。捕獲記録に現れるシロナガスクジラとマッコウクジラは、現在の日本海ではほとんど見られない種類であり注目される。なお、イワシクジラの記録は、回遊形式からニタリクジラまたはミンククジラの可能性（石川と渡邊 2014）が高い。

表2. 「場長必携」から作成した東洋捕鯨蔚山事業場の捕獲統計（明治43年-昭和19年）

	背美	白長須	長須	座頭	抹香	鯨	克	計
計	1	7	2,114	68	2	2	1,018	3,212
明治43年度 (1910)		3	95	3			107	208
明治44年度 (1911)		1	58	6			146	211
明治45年度 (1912)			64	5			90	159
大正2年度 (1913)			121	12			111	244
大正3年度 (1914)	1		62	3			90	156
大正4年度 (1915)			54	5			85	144
大正5年度 (1916)			92	7			43	142
大正6年度 (1917)			72	2			87	161
大正7年度 (1918)			6	1			52	59
大正8年度 (1919)			67	1			41	109
大正9年度 (1920)			64	2			35	101
大正10年度 (1921)			24	2			24	50
大正11年度 (1922)			35	1		1	13	50
大正12年度 (1923)		1	30				1	32
大正13年度 (1924)			12	1			9	22
大正14年度 (1925)			46				10	56
大正15年度 (1926)			24	1			5	30
昭和2年度 (1927)			77	1			6	84
昭和3年度 (1928)		2	44				14	60
昭和4年度 (1929)			27				10	37
昭和5年度 (1930)			45				23	68
昭和6年度 (1931)			52	2			14	68
昭和7年度 (1932)			44			1	2	47
昭和8年度 (1933)			46					46
昭和9年度 (1934)			20					20
昭和10年度 (1935)			64					64
昭和11年度 (1936)			73	2	1			76
昭和12年度 (1937)			81		1			82
昭和13年度 (1938)			115	1				116
昭和14年度 (1939)			93					93
昭和15年度 (1940)			89	1				90
昭和16年度 (1941)			98					98
昭和17年度 (1942)			106	9				115
昭和18年度 (1943)			45					45
昭和19年度 (1944)			69					69

砲手と捕鯨船

合併当初の東洋捕鯨にはノルウェー人砲手が数多く在籍していた（明石編 1910）。同様にアンドリュースの著書や報告書にはノルウェー人砲手の名前がしばしば登場する。蔚山では前出のメイン丸 Main のメルソン Melson、捕鯨船ではほかにオルガ丸 Olga の名前が見える。近代捕鯨は別名ノルウェー式捕鯨と呼ばれるとおり、捕鯨砲を発明したノルウェーは捕鯨先進国で、20世紀初頭の日本の捕鯨船には多数のノルウェー人砲手が高給で雇われていた。ノルウェーでは1904年を最後に北部での沿岸捕鯨が禁止となり（Tonnessen and Johnsen 1982:66-67）、これにより多数の砲手が日本に渡ったという（江見 1907）。

ノルウェー人砲手の在籍状況については、「場長必携」の記録を見るとその割合が事業場によって異なることがわかる。本論ではカタカナ書きの外国人名はすべてノルウェー人と判断し、「配属ノ船名及上級船員」からその割合を算出した。蔚山の場合、大正3-15（1914-26）年度では、砲手の年度あたりの実数は7-13人で、そのうちノルウェー人砲手の割合は60-100%、年度平均で77%だった。一方、日本人砲手は計11人が従事し、そのイニシャル（姓・名の順）は出現順にM.Y., K.G., F.T., K.S., N.T., K.S., T.K., A.R., O.K., A.T., F.S.である。ノルウェー人砲手は、昭和初期（1930年前後）でもその割合は高く、1927-29年度には9-10人中の78-60%を占めていた。昭和5-6（1930-31）年度は11-8人中36-38%と比率が下がり、1932年度以降はまったく見られない。これは1931年（昭和6）に満州事変が起こり、以降、日本が戦時下となったことの影響と想像されるが、詳しいことはわからない（表3）。

ノルウェー人砲手の割合について、当時の主力事業場であった鮎川事業場の「場長必携」を見ると、割合が高かったのは大正3-13（1914-1924）年度であり、年度あたりの砲手の実数は6-13人、うちノルウェー人は1-7人で、割合は14-50%であり、蔚山に比べて低いことがわかる（表4、砲手の氏名は省略）。鮎川におけるノルウェー人砲手の割合は、大正14（1925）年以降さらに低くなり、0-13%であった。これは、朝鮮半島沿岸の捕鯨では、ロシアが着業した当初からノルウェー人の割合が高かったことが影響しているのかも知れない。

砲手の着業状況を見比べてみると、様々な事業場を回航する砲手（「回航砲手」とする）と単一の事業場にほぼ固定された砲手（「固定砲手」とする）の2つの類型に整理できるようである。蔚山事業場の場合、固定砲手はハンスヒュールム、スコントルプ、ラーセンの3人であった（表3）。また、砲手が乗り込む捕鯨船はある程度決まっていたこともわかった。おなじ組み合わせで日本列島や朝鮮周辺の事業場を回航して操業し、各地の漁場の特徴を覚えていったと想像される。

一方、捕鯨船についてもノルウェー人砲手が在籍していた大正3年-昭和6年の場合、年度あたりの実数は6-12隻、年度平均は9.17隻であった。操業隻数の大小は、操業日数や捕獲頭数を反映していないようで、回航の都合によると想像される。大正年間に現れた捕鯨船は、出現順にレツクス丸、天富丸、電丸、第一東郷丸、第二東郷丸、第五東郷丸、第5捕鯨丸、メイン丸、にこらい丸、オルガ丸、曙丸、第一捕鯨丸、第三捕鯨丸、第五捕鯨丸、神功丸、第一太平丸、諏訪丸、アイランド丸、ギョルギー丸、昭和丸、第二昭和丸、千島丸の22隻であった（表5）。捕鯨船は同一年に複数の事業場を回航することが見られ、たとえば、レツクス丸は1933年（昭和8）に「蔚山事業場長必携」に現れる一方、「網走事業場長必携」にも現れ、操業期間が異なる朝鮮半島沿岸とオホーツク海の両方の漁場を行き来したと考えられる。なお、アンドリュースが蔚山に滞在した1912年については、残念ながら「蔚山事業場長必携」には記録がない。

表3. 「場長必携」から作成した東洋捕鯨蔚山事業場の砲手とノルウェー人の割合(%)。灰色部分がノルウェー人砲手、日本人はイニシャルとした(大正3年-昭和6年)。

年度	大正3 1914	大正4 1915	大正5 1916	大正6 1917	大正7 1918	大正8 1919	大正9 1920	大正10 1921	大正11 1922	大正12 1923	大正13 1924	大正14 1925	大正15 1926	昭和2 1927	昭和3 1928	昭和4 1929	昭和5 1930	昭和6 1931
ノルウェー人の割合	80	90	70	67	100	73	73	100	73	69	71	60	78	78	78	60	36	38
ノルウェー人の実数	8	9	7	6	6	8	8	7	8	9	5	6	7	7	7	6	4	3
砲手の実数	10	10	10	9	6	11	11	7	11	13	7	10	9	9	9	10	11	8
ヨンセン	1	1		1	1													
ヤコブセン	1		1	1			1					1						
キッテルセン	1	1												1				
ヒュールム	1	1	1							1					1			
ハンスヒュールム	1	1	1	1	1	1		1	1		1	1	1		1	1	1	1
M. Y.	1		1	1		1	1		1									
スコントルブ	1	1	1	1			1	1	1	1	1	1	1			1		
オルセン	1	1	1	1														
ヨハンセン	1	1	1		1		1	1										
T. G.	1		1															
F. T.		1																
アンダーセン		1																
ラーセン		1	1		1	1	1	1	1	1	1	1						
K. S.			1	1														
N. T.				1		1												
エーヒュールム				1														
ベテルセン					1													
ゼンセン					1	1		1	1	1				1				
エービーヤコブセン						1												
アールジヤコブセン						1			1									
イーアンダーセン						1	1											
キナンダー						1	1					1						
エ デー メルソム						1												
K. S.						1	1											
T. K.							1		1	1		1						
カールセン							1	1	1	1	1	1	1	1	1			
メルソム							1	1	1	1			1	1	1			
ハンセン									1	1						1	1	1
A. R.										1	1						1	
ダビッドセン										1	1			1				
O. K.										1	1	1	1	1			1	1
A. T.										1	1	1						
ブロンニツク											1		1	1	1	1	1	
エレフセン												1	1	1	1	1	1	1
空欄													1					
F. S.														1				1
A. S.															1			1
Y. T.															1			
ハンス															1			
ピンセン																1		
クリステンセン																1		
I. Y.																	1	1
M. S.																	1	1
エル ラーセン																	1	1
イブセン																		1
I. T.																		1
H. M.																		1
T. K.																		1
O. H.																		

表4. 「場長必携」から作成した東洋捕鯨鮎川事業場の砲手とノルウェー人の割合(%, 大正3年-昭和6年)。

年度	大正3 1914	大正4 1915	大正5 1916	大正6 1917	大正7 1918	大正8 1919	大正9 1920	大正10 1921	大正11 1922	大正12 1923	大正13 1924	大正14 1925	大正15 1926	昭和2 1927	昭和3 1928	昭和4 1929	昭和5 1930	昭和6 1931
ノルウェー人砲手の割合	17	33	50	50	54	14	31	50	44	44	42	10	0	13	0	0	0	9
ノルウェー人砲手の実数	1	2	4	3	7	1	4	4	4	4	5	1	0	1	0	0	0	1
砲手の実数	6	6	8	6	13	7	13	8	9	9	12	10	12	8	8	8	8	11

表5. 「場長必携」から作成した東洋捕鯨蔚山事業場の捕鯨船名（大正3年-昭和6年）

年度	大正3	大正4	大正5	大正6	大正7	大正8	大正9	大正10	大正11	大正12	大正13	大正14	大正15	昭和2	昭和3	昭和4	昭和5	昭和6	
実数	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	
レックス丸	1	1				1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	1	1	
天富丸	1			1		1	1	1		1	1			1	1		1	1	
電丸	1	1	1		1		1		1										
第一東郷丸	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	
第二東郷丸	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		1	1			1	1		
第五東郷丸	1	1	1	1	1	1	1		1			1							
曙丸		1	1	1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		1		
第一捕鯨丸		1	1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
第三捕鯨丸				1		1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
第五捕鯨丸	1			1		1	1		1	1					1	1	1		
メイン丸	1																		
にこらい丸	1	1	1								1								
オルガ丸	1	1																	
メイン丸		1																	
神功丸				1	1	1			1	1			1	1	1				
第一太平丸				1		1	1												
諏訪丸				1							1		1	1	1	1	1	1	
アイランド丸									1	1	1	1				1			
ギョルギー丸										1		1	1	1					
昭和丸																	1	1	1
第二昭和丸																		1	1
千鳥丸																			1

アンドリュースの朝鮮探検

蔚山事業場での鯨類調査を1912年3月初めに終えたアンドリュースは、前述のように下関に3週間ほど滞在し、その後ソウルのアメリカ領事館に立ち寄ったと考えられる。そして朝鮮探検 The Korean Expedition に向かった。

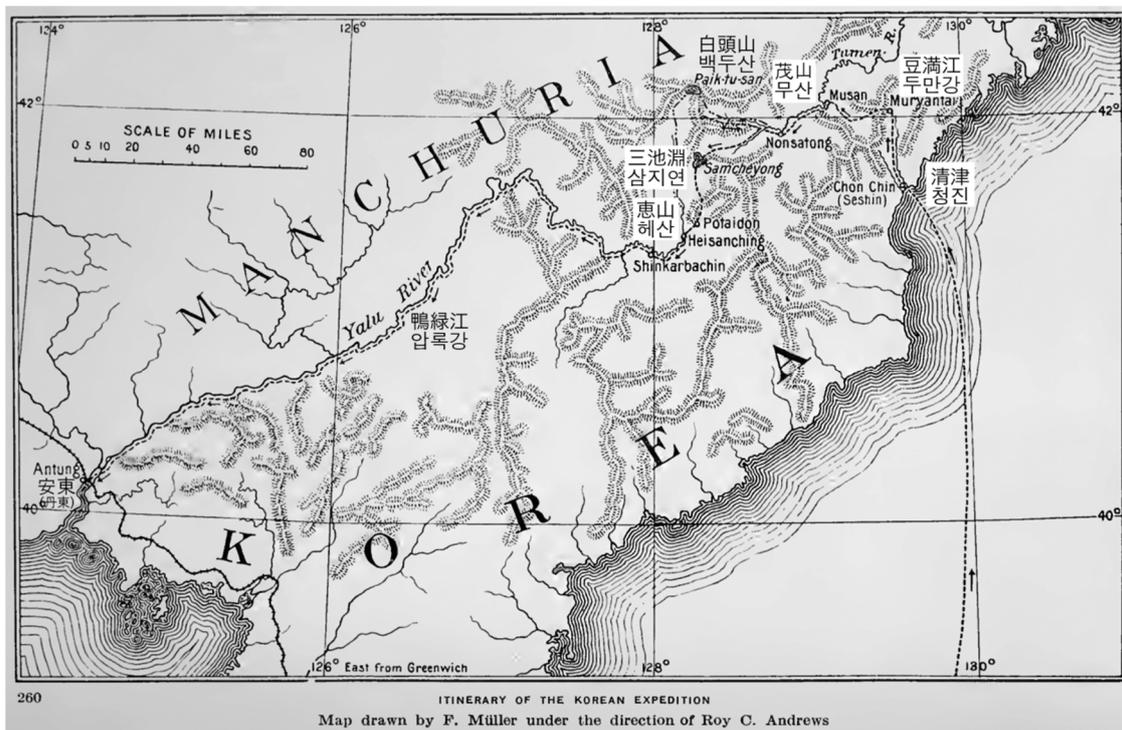


図8. アンドリュースの朝鮮半島探検の行程（Andrews 1912b: 260に加筆）。

朝鮮探検の経路は釜山 Pusan から船で日本海を北上し、朝鮮半島北東部に位置する清津 Chon Chin に向かい、豆満江 Tumen River を遡り白頭山 Paik-tu-san 山麓を抜け、鴨緑江 Yalu River を筏で安東 (丹東) Antung まで下るといふ、朝鮮半島の付け根を東から西に横断するものであった(図8、Andrews 1912b: 260)。途中、立ち寄った町や村は、富寧 (ふねい) Puryon、茂山 (むさん) Muryantai、Musan、Nonsatong [農事洞か]、普天 (ふてん) Potaidon、恵山鎮 (えさんちん) Heisanching、新■ [加の下に乙] 坡鎮 (しんかるばちん) Shinkarbachinなどで、また白頭山麓の湖三池淵 Samcheyong を訪れている。鴨緑江に出たからは1日に最大70マイル (112km) を船で下った (Andrews 1912b)。残念なことに探検の報告書や著作には日付が記されておらず、出発日や到着日、途中経過の日には今のところわからない。この探検では、おそらくこの地方唯一となる100年前の写真を多数撮影し、160点を超える陸生哺乳類の標本を持ち帰り、アメリカ自然史博物館のコレクションに付け加えた。調査の様子は一般向けの書籍でも読むことが出来る (Andrews 1929: 132-147、Andrews 1943: 109-118)。また、この探検はアンドリュース以外は全員が現地スタッフという形での最後の探検となった。

その後のアンドリュース

朝鮮半島探検を終えたアンドリュースは、1916年に妻のイベット Yvette Borup Andrews を合わせた3人 (と現地スタッフ) で揚子江から雲南への探検を行なうなど、東アジアでの学術探検を成功させる (Andrews and Andrews 1918)。そして1920年代になると中央アジア探検を組織し、モンゴルで卵を含む恐竜の化石を大々的に発掘するなど、その名声を確実なものにしていった。この頃になるとアンドリュースは大探検隊の隊長であり、組織運営と資金集めが主な仕事となっていた。

アンドリュースの日本や朝鮮半島での鯨類調査と探検は、その後の活躍に比べれば地味で知られていない。しかし、アンドリュースの科学者としての顔は鯨類調査でこそ見られるものである。下関はその調査の原点であり結節点としての役割を担ったのであった。

謝辞

「蔚山事業場長必携」の複写と使用を許可された日本水産株式会社、写真の複写と掲載を許可されたアメリカ自然史博物館研究図書室、手紙の複写と使用を許可されたアメリカ自然史博物館研究哺乳類研究部、地図の掲載を許可された岐阜県図書館に感謝申し上げます。なお、本論はJSPS科学研究費補助金「もうひとつの近代鯨類学「第一鯨学」の形成と展開」(基盤研究C:2011-2013、課題番号23501209) および「明治大正期に遡る一次資料「事業場長必携」を用いた東洋捕鯨の操業復元」(基盤研究C:2014-2016、課題番号26350365) による成果の一部です。

引用文献

- 明石喜一編. 1910. 本邦乃諾威式捕鯨誌. 東洋捕鯨, 大阪. (復刻版. 1989「明治期日本捕鯨誌」マツノ書店, 徳山.)
- Andrews, R. C. 1912a. An Expedition in Korea. *The American Museum Journal*, 12(6): 207-213.
- Andrews, R. C. 1912b. An Exploration of Northeastern Korea. *The American Museum Journal*, 12(7): 259-267
- Andrews, R. C. 1914. Monographs of the Pacific Cetacea. I. The California gray whale (*Rhachianectes glaucus* Cope). Its history, external anatomy, osteology and relationships. *Memoirs of the American Museum of Natural History*, 1: 227-287.

- Andrews, R. C. 1916. *Whale Hunting with Gun and Camera*. D. Appleton, New York, 322pp.
- Andrews, R. C. 1929. *Ends of the Earth*. G. P. Putnam's Sons, New York, 355pp.
- Andrews, R. C. 1943. *Under A Lucky Star. A Lifetime of Adventure*. Blue Ribbon Books, New York, 355 pp.
- Andrews, R. C. and Andrews, Y. B. 1918. *Camps and Trails in China : a narrative of exploration, adventure, and sport in little-known China*. Appleton, New York, 334pp.
- 江見水蔭. 1907. 實地探検捕鯨船. 博文館, 東京. 202pp. (復刻版 捕鯨船: 実地探検 シリーズ出
につぼん記 明治の冒険者たち第6巻. ゆまに書房. 1993)
- 学生社編. 1981. 朝鮮半島五万分の一地図集成. 学生社, 東京.
- 石川創・渡邊俊輝. 2014. 山口県鯨類目録. 下関鯨類研究室報告, 2 : 1-14.
- 神長英輔. 2002. 北東アジアにおける近代捕鯨業の黎明. *スラヴ研究*, 49 : 51-79.
<http://hdl.handle.net/2115/38978>
- Nichols, J. T. 1913. Note on Teleosts collected by Mr. Roy C. Andrews in Japan, with Descriptions of Two New Species. *Bulletin American of the Museum of Natural History*, 32: 179-183.
<http://hdl.handle.net/2246/1933>
- 渋谷辰三郎. 1967. 捕鯨回顧. 私家版, 長崎. 139pp.
- Tønnessen, J. N. and Johnsen, A. O. 1982. *The History of Modern Whaling*. University of California Press, Oakland. 798pp.
- 宇仁義和・ロバート=ブラウネル・櫻井敬人. 2014. ロイ・チャップマン・アンドリュースの日本と朝鮮での鯨類調査と1909-1910年の日本周辺での行程. *日本セトロロジー研究*, 24 : 33-61.